

和紙 だより

■目次 「修復用和紙の世界事情」

越前和紙への提言 増田勝彦さん	1
シヨップレポート マスミ	2
レポート 「日仏の機械抄き紙」公開研究会 和紙ミニコーナー	3
情報欄	4

越前和紙への提言



■増田 勝彦(ますだ かつひこ)
和紙文化研究会副会長。1965年、東京教育
大学農学部卒業後、遠藤得水軒(日本画・書
跡・文書等修復工房)に入門。1973年、東京
国立文化財研究所(現・東京文化財研究所)
修復技術部。1981～1982年に文化庁派遣
ユネスコ職員として、文化財保存修復研究
国際センター(ICCROM)に向向。海外に和紙
を使用した修復方法を広め、国内外の文化
財修復保存会議で発表。東京芸術大学大
学院美術研究科教授、昭和女子大学大
学院生活機構研究科教授を歴任。文化財保存、特
に紙資料を中心とする保存修復及び紙の
技術史に詳しい。

■増田勝彦さん(文化財保存、和紙研究家) 「修復用和紙のグローバル化と未来」

●世界に知られる修復素材、和紙
戦前、大英博物館やワシントンのフリーア美
術館など、欧米の美術館での東洋美術に関す
る修復は、表具技術者を招聘して修復に当
らせていました。欧米でアジア美術という
研究者の数も圧倒的に多い中国美術がメ
ジャーですから、美術商が送り込んだこれら
日本人表具師の待遇は良くなかったよう
極めて限られていた人にしか知られてい
なかつた和紙を使った修復が世界的に知ら
れるようになったきっかけは、何と言つても
一九六六年十一月に発生したイタリア・フ
イレンツェの大洪水です。その時、日本の
国宝修理装演師連盟は文書救済用に和紙
をフイレンツェに送りました。実際に日本
から寄贈された和紙がどのように使われ
たかはわかりませんが、柔軟かつ強靱で
使いやすい上に、中性アルカリ性の日本
の手漉き和紙がにわかに注目されるよう
なつたのです。一九五九年、ウィリアム・
パローが発表した論文で、欧米では酸性
紙問題は既に周知されていましたが、日
本で知られるようになるのは八十年代に
入つてからです。フイレンツェの洪水の一
ヶ月後には、浮世絵研究家を夫に持つケ
イコ・ミズシマ・キーズ女史がこれだ!
と思つたのか、日本に飛んできて京都で
表具技術の研修を受けました。彼女は米
国へ戻つて日本で学んだ技術を応用し、
紙本美術品の修復専門家として独立。一
九八八年、京都で開催された国際文化
財保存科学学会では「浮世絵の保存につ
いて」を発表。和紙を使った紙修復技
術を米国に広めた功績は大きい



1994年ICCROMでの研修の様子

と思います。

●和紙の修復技術の特長

私は一九七六～七七年、ローマで屏風製作の工
程を上演後、一九八〇～八一年には、ユネスコ決
議で創設された ICCROM (文化財保存修復
研究国際センター) に派遣され、ベニス、ローマ、
米国で六回、講義と実技研修を行いました。
日本の表具技術の中で、欧米の美術作品にも
応用できると思われる、裏打ち技術、仮張りの
製作技法や正麩糊の作り方、刷毛の使い方
を含めた技術講習でした。
日本の修復技術の根本には、古いものを別の
装丁に仕立て直す、手紙を巻物にする、切れを
軸にするなどの「仕立変える技術」という思想
があり、経年変化や用途の変化を予め想定し
たものです。和紙は、掛け軸、屏風、襖などに使

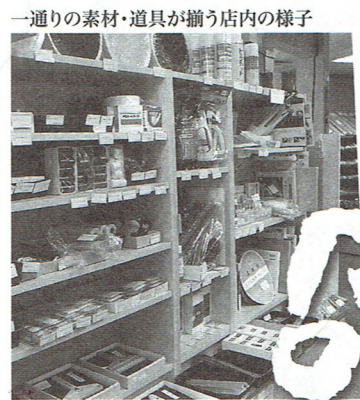
われてきた歴史から、硬軟、薄厚の種類が多く、
本紙との親和性に優れ、水に濡れると作業性
が良く、透明性があり、折れに強く、紙の目が
明確な紙や方向性が無い紙など種類も多いこ
とから、様々な紙修復に適しています。欧米で
は紙を平らにするのは圧力、プレス機で行いま
すが、日本の仮張り技術は、紙の薄厚の重ね方
、水の吹きかけ方、糊の塗り方などで微妙に紙
の張力を調整して、乾いた時にピンと平らに
なるように考えられています。プレス文化と
張力の文化ですね。しかも、張力を利用するの
で大袈裟な道具が要らないのです。帰国後の一
九八二年、表具技術の記録を含む「表具の科
学」という論文が英訳され、外国人が皆まで勉
強しているという話が風の便りに聞こえてき
て、東京文化財研究所でも外国人向け講習会
を毎年に行うこととなり、現在まで続いてい
ます。

●工芸品としての和紙を世界へ

欧米の保存修復は、マネージが重要です。大学
で専門知識をしっかりと学び、修復方針を出せ
る人の決断の下で修復素材も決められ、手先
が動く修復技術者を指図するのです。修復素
材として人気のある典具帖紙でいえば、私な
どは人間国宝の方が漉いた、地合いも美しく、
繊維もキラキラ光っている紙に感動するの
ですが、欧米の美術館では、化学系の人達が実験
吟味して仕様書を作り、〇を出した資材で
ないと修復部門の人達は使えません。紙の美
しさや表情には関心がなく、必要な物理特性
を満たさなければ良いのです。機械抄きは
安く、手漉きよりも薄いものが出来て、均一で
大きい紙が出来るので、彼らは手漉きにはこ

■修復用和紙供給事情

―株式会社マスマシ



一通りの素材・道具が揃う店内の様子

保

(株)マスマシは表装、内装、襖材料等の卸・小売や仕立てを基軸に、修復用和紙や表具基底財を大英博物館、ルーブル、ボストン、メトロポリタン美術館など、海外の名だたる美術館に供給している会社でもある。社長の横尾靖さんは、大手電機メーカーの海外駐在員として

アフリカ・ケニヤを始め東南部アフリカ諸国で辣腕を振るい、十三年間勤務の後、岳父の家業を引き継いだ。東京、大塚駅から歩いて五分ほどの本社ギャラリーでお話を伺う。

●表装文化を絶やさず

戦後間もない一九四五年、マスマシの前身「平和木工」は、和歌山市で襖製造業として創業され、六二年には現在の場所、豊島区巢鴨に東京工場を設立。茨城にも工場を作り、和歌山・東京・茨城の三ヶ所を拠点に、襖の製造では一時期日本一に近い取引額を誇った。襖の需要減少を機に、先代は襖・内装・表装をバランス良く発展させようと奮闘。一九九二年、一次たまたまとしていた店を横尾氏が引き継いだ。一五〇〇年もの間、継承されてきた日本の表装文化を絶やしたくなかったからだ。爾来、従来の事業を中心に据えつつ、販路を海外に向けた表

装・修復材料の輸出、又日本伝統文化の体験教室、ギャラリーの企画運営など、業務を「文化支え」にする体制を整えてきた。

当初は海外に取引先もなく、とにかく一度ヨーロッパに行ってみようと、和紙のサンプル帳だけを携え、イギリス、フランス、オランダ、ドイツなどを回った。折しもロンドンでIPC（国際紙会議）が開催され、業者の展示即売会に誘われた横尾さんは、和紙、糊、刷毛、道具などを持って実演販売したところ、ブリスには人だかりができた。欧米の美術館には、日本で修復技術をきちんと学び、本場で教える人も多いが、彼らは口々にこういったものが買えないと訴えるのを聞き、確かな手応えを掴んだ。

●信頼関係が第一

早速、海外用に科学的データを記した和紙見本帳を作ろうとしたが、当初は澆き元も情報を出さず、産地に再三出かけて行つては、正確な情報を正直に伝えてもらわなければ売れないと説得。PHなどは社長自ら測った。改訂を重ねた最新の和紙見本帳には、産地、原料、重量、



社長の横尾靖氏

填料、製造工程（手漉き・機械抄、煮熟剤、乾燥法等）、サイズ、PH、主たる用途など、使い手の知りたい情報が一枚一枚に簡潔に整理、印刷されている。美術館への納品はほとんどが直接取引。襖を製造していたので、木、布、紙の加工

技術に強い上、職人のネットワークもあるので、品物の仕立も可能だ。

「うちは和紙が主体ですが、軸に使う裂地、桐箱、刷毛や糊、書籍まで在庫していて一通り揃うので、美術館関係者から口コミで広がり、海外のお客様も京都まで行く手間が省けるとよく寄って下さいます。ただし、大事なことはうちにその時なくても、相談に乗り、真摯に対応してあげることです。だって、彼らは日本の文化財に敬意を払い、修理して守ってくれて、世界に広めてくれてる専門家なのですから、感謝して、将来とも繋がる信頼関係を育まないといけません。」

ネットでの問い合わせも多い。昨年オランダで修復中の掛け軸の相談を受け、一級品の国産正絹のみを使う東京豊島区のお老舗組紐屋さんを探し出し、やりとりをしながら品物を納品した。担当修復家は感動して、日本にまでお礼に訪れ、横尾さんは彼を組紐工房にも案内した。

●和紙だけでは伝わりにくい

一番の問題点は、現在の紙を作ることでできる人が限られており、注文がそこに集中し、半年先一年先でない納品できないケースが多いことだ。一方美術館側も年間予算があり、長期間待てない場合もある。修復予算は限られている上、絵画の購入や施設整備に回されることも多い。加えて一枚の和紙がどうしてこんなに高いのか、何故そんなに待たされるのか、日本の和紙事情を十分理解している人は少ない。「たまたま手に入ればラッキーでは、本当は商売になりません。その辺を海外の美術館にも理解して頂かないといけません、紙だけ持つて行って素晴らしいと言つても、専門家は



監修本：別冊太陽「和紙と暮らす」(2004年、平凡社) 「WASHI紙のみぞ知る用と美」(2016年、LIXIL出版)

だわりません。現在、政府の肝入りで大々的にヨーロッパに売り込んで「韓紙」も地合いがそれほどでなくとも、要件を満たす場合には採用されるケースも多くなってきました。ドイツの修復工房では、楮の繊維を輸入して、直接繊維を傷んだ紙の上にはらまいて修復する技術もあり、それで十分効果が出る。セルロースナノファイバーなどの技術も話題になっていきます。ドイツの紙商社の修復用楮紙も番号で選ぶ見本帳になっていて、一見薄美濃紙のようですが、日本製ではありません。和紙を使った修復技術も使用方法も広まって良かったのですが、辛いところです。私は、上層部のほんの一部の人達しか和紙を使えなかつた平安、鎌倉、室町という時代があつたように、将来いわゆる本物の和紙はそのような状態にならざるを得ないのではないかと考えています。今から超高級工芸品としての和紙製品を、歴史や深い文化性と共にアピールし、日本だけでなく世界のお金持ちに使わせていかないといけないと思うのです。

いざ知らず、一般の人は理解できません。だから日本の文化を総合的に見せて、その中で紙がどれだけ大事か、という風子に持つていかないといけない。」

このような意識から、マスマミでは、生活に生かす表装技術、和綴じ本、金銀箔、書道、水墨画、篠笛などを学ぶ、和の文化教室「マスマミ道場」



「マスマミ道場」で表具作りを学ぶ受講生

を一九九五年から始め、軌道に乗せた。また、有形無形の日本の豊かな文化遺産の研究と保存継承を目的に、講座や講演会、コンサート、海外文化交流を行う「一般社団法人ゆらび」という会も運営している。

「例えば私が提案した和紙の折畳み茶室屏風ですが、ここに入っ

「ゆらび」の活動 韓国釜山 日韓文化交流イベント (2012年)



ミラノ万博ジャパンパビリオンに 出展した茶室屏風 (2015年)

レポート

■公開研究会「日本とフランスにおける製紙の技術：日本とフランスの機械抄き紙」

昨年十月三〇日、美術品修復、美術用紙に使われる日仏双方の紙の製法や性質を調査・研究・情報交換を目的とした四回目の公開研究会が東京の昭和女子大学で開催された。今回のメインテーマは「日仏の機械抄き紙」。紙製の美術作品を修復する上で、修復される側の紙と修復に用いる側の紙の性質や製法、その技術史を調査研究することで、洋紙・和紙の違いを情報として共有し、修復に生かすのが狙いだ。昨今は西洋の紙作品が日本で修復されることも多く、機械抄き紙の性質を仔細に知ることが重要となってきた。発表内容は以下の通り

主催者の川村朋子さんとヴァレンティヌ・デュバルさん



一、作品に使われる「洋紙」の例、およびその損傷：川村朋子（山領絵画修復工房、紙本修復家）

二、一七五〇～一八七〇頃の西洋における伝統的な紙から近代的な紙への移行：ジャック・プレジュー（ムーラン・デュ・ヴェルジェ紙漉き師）

三、紙の製造法は洋書籍の挙動にどう影響するのか：ナディーヌ・デュマン（洋装丁・製本修復）

四、明治時代の製紙工業揺籃期について：増田勝彦（元昭和女子大学大学院教授、東京文化財研究所名誉研究員）

五、異なる製紙機械の比較と生産される紙の品質への影響：ジャンクロード・ルー、ニコブロック（フランス国立グルノーブルパゴラIN2P製紙技術大学教授）

六、懸垂短網抄紙機による楮紙の製造方法について：有吉正明（高知県立紙産業技術センター主任研究員）

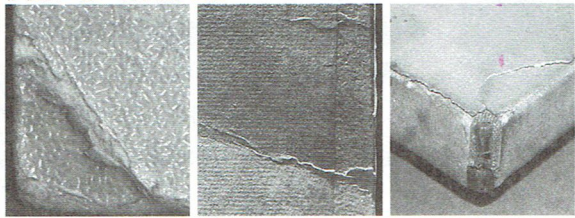
七、本共同研究会総括および今後の展開：ヴァレンティヌ・デュバル（ルーブル美術館紙本修復室責任者）

●洋紙の機械生産と紙の変容

まず、川村氏が修復前の洋紙作品におけるダメージの状態（紙の破れ方、波打ち、しわ、折れなど）をスライドで示し、様々な性質の洋紙とその損傷状態のイメージを参加者と共有した。また、昨今機械抄き和紙への関心もこの分野では高いと述べた。

一昨年、フランスの人間国宝に当たる「国家最優秀技術職人章 Meilleur Ouvrier de France」を授与され、産業革命前の西洋紙の復元を行った紙漉き師ジャック・プレジュー氏は、伝統的洋紙から近代的洋紙への移行過程における紙質の変化を歴史的に辿った。産業化以前の手漉き西洋紙には何十種類もの紙が存在し、主に絵筆用、葦筆用、ペン用の三つの用途に合わせて、東洋紙、イスラム紙、西洋紙を使い分け

修復前の様々な洋紙の損傷

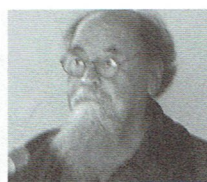


た。洋紙製紙業は、水車やそれを導く水路、新しい打解装置を備えた工場の建設、大量のフェルトや麻布原料、サイジング用の明礬、販路の開拓が必要で、当初から家内工業的なものではなかった。商人主導の機械化の過程は紙の質を変容させ、市場を変え、技術革新を次々に生み出し、印刷技術と相まって大量生産型の紙製造に邁進していく。その様相は農閑期に家族単位で紙を漉いていた日本、中国、韓国等と異なる」と語った。

●日本の機械抄き導人と機械抄き和紙

午後のフォーラムでは、増田勝彦氏が日本における明治以降の洋紙製紙機械導入、主な抄紙機、紙の社会需要の増大や用途の変化などを交えながら辿った。当時欧米では機械製紙が確立されており、新興国日本は欧米各国にとつて格好の紙輸出の標的であった。新政府が発行する紙幣、切手用紙、税収確保のための地権発行、公債などの証書用紙、郵便事業用紙を始めとする行政に必要な紙、新聞、雑誌、小説類などの民間需要、国民教育制度整備による教科書需要などにより、廉価な紙の大量生産を熱望する状況が起こる。しかし当初から洋紙だけで、需要増加に対応できたわけではなく、始めは楮、三桮、藁などを混ぜた手漉き和紙で多くの需要は満たされた。実際、和紙生産は増加し、明治三十年頃までは和紙生産額が機械抄き洋紙の七倍ほど多い。紙幣などの重要用途の紙を政府内で製造しようと政府直轄の工場が明治八年にでき、明治十二年にはアメリカ製の丸網抄紙機を模造して国産抄紙機を完成させた。明治三十年には、ミツマタを原料に洋紙と和紙の技術を合体して作った「局紙」が海外で Japanese vellum として

ジャック・ブレイユ氏



ナデューヌ・デュマン氏



増田勝彦氏



ジャンククロード・ルー・エプロック氏



有吉正明氏



もてはやされ、局紙を手本にドイツ、オーストリアで「模造鳥の子紙」いわゆるシミリー・ペーパーが生産された。大正時代にはシミリー・ペーパーをさらに真似た、機械抄きのいわゆる「模造紙」の国産化の道を歩むこととなる。

程は、基本的に異なる処理を行うことはなく、むしろ価格や用途の違いが紙質の違いを生むと語った。

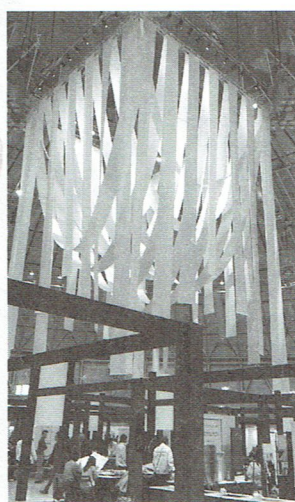
現在、五十の製紙工場、二十の手漉き工場を抱える高知県の紙産業技術センター主任研究員、有吉正明氏は、手漉き和紙と機械抄き和紙の製造工程、紙質の比較などを行った。特に高知県の得意分野、修復にもよく使用される極薄の典具帖紙や障子紙の機械抄きは、昭和三十年台前半、いの町の高岡丑太郎氏により開発された「懸垂短網式抄紙機」をベースに可能となった。「にない」と呼ばれる繊維の結束を取り除くロールスクリーンと繊維を同方向にだけ流させないための揺らす網の構造が、この抄紙機の特徴。機械抄き、手漉き和紙の原料処理工程は、基本的

第三十三回伝統的工芸品月間国民会議全国大会、福井大会開催

昨年十一月二十四日(二)七日、「伝統的工芸品月間国民会議全国大会」が福井県で開催された。本大会は昭和五十九年からホスト県の持ち回りで開催されている、いわば「工芸のEXPO」。今回は「幸福の国『ふくい』から伝える匠の技」をキャッチフレーズに、北陸新幹線や舞鶴若狭自動車道で首都圏からのアクセスが向上した福井県で、全国の工芸品の展示・販売・製作実演・製作体験・商談会や様々な催しが行われた。

鯖江市文化センターでは記念式典の後、全国伝統工芸士主催のシンポジウムで、「伝統工芸に関する国内外の最近の動向」について発表が行われた。

越前市のサンドーム福井では、福井が誇る越前和紙、越前漆器、越前打刃物、越前焼、越前箆などの展示・販売の他、「工芸×菓子コラボ」ふくい菓子博 2016も同時開催され、訪れた人は伝統工芸の器でおいしいスイーツに舌鼓を打った。中でも、越前和紙製の大きな恐竜や千mの和紙テープで構成された迫力ある「和紙の光柱」などが会場に展示され注目を浴びていた。



情報欄

●イベント情報

■和紙がむすぶ福井のころ(仮)

時:平成29年2月5日(日)~2月27日(月)

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

■小津和紙ギャラリー特別展

「日本画の紙を極める-越前和紙が創り出す日本画の粋-

時:平成29年2月6日(月)~11日(土)

場所:東京日本橋 小津和紙

-ギャリートーク 2月11日(土)11:00~12:00

岩野麻貴子さんが語る三代目岩野平三郎の素顔

-紙漉き体験・実演

越前和紙伝統工芸士 柳瀬徹二さん

■東京インターナショナル・ギフト・ショー春2017

時:平成29年2月1日(水)~3日(金)

場所:東京ビックサイト東館 展示

■福井県伝統工芸士会連合会展

時:平成29年2月10日(金)~22日(水)

場所:東京伝統工芸青山スクエア 展示・即売

■越前和紙青年部会創立50周年事業

時:平成29年3月20日(月)--記念講演会と記念式典

平成29年3月21日(火)--産地見学会

場所:越前市商工会2階ホール

■和紙の文化博物館リニューアルオープン

時:平成29年4月8日(土)

場所:和紙の文化博物館(越前市新在家町)

編集後記

今号でお邪魔したマスマでは様々な勉強会も開催しており、「ホツマツタエ」の本をご紹介頂いた。ホツマツタエとは、古代大和ことばで綴られた一万行に及ぶ叙事詩で、縄文後期中葉から弥生、古墳前期まで約一千年の神々の歴史・文化を今に伝えているという。古事記、日本書紀の元になった書物とも言われ、独特の象形文字ホツマ文字で表されている。興味津々!(よ)